

四国も元気にする青年海外協力隊員たち、ふるさとへの思いを語る

2010年11月16日

2010年11月7日(日)に開催された「かがわ国際フェスタ2010」の一環として、日本も元気にする青年海外協力隊in四国トークショーを開催しました。これは、青年海外協力隊での活動経験を生かして、四国各地の町や村を元気にしようと活躍している四国各県の協力隊経験者4名の姿を紹介するものです。

予め公募で申し込んだ人たちを中心に入場者数は約200名。熱心にメモをとる人もおり、会場は熱気に包まれました。コーディネーターには海外取材経験も豊富で、青年海外協力隊の活動先も何度も訪れておられる福留功男氏。協力隊経験と現在の活動とのつながりや地域への思いについてパネリストから印象的な言葉を引き出してもらいました。



福留功男氏

9千人近くの外国人が居住している香川県高松市で『日本語サークル「わ」の会』を仲間とともに立ち上げて以来、15年以上にわたり外国人居住者への日本語指導をボランティアで行う平田百合子(ひらたゆりこ)さんは、ホンジュラスに水泳指導のために派遣されていた隊員時代を振り返ります。異文化に囲まれる協力隊時代を頑張りぬけた理由として、常に心配してくれた仲間の存在が大変ありがたかったと話をしてくれました。帰国後、結婚・子育てなど大変だと感じる事が多かったが、近所に住む日本語が十分にわからない外国人にとっては、自分以上に相当な不安感や疑問を抱えているのではと感じ、生きていくための日本語を教えたいとボランティアグループを立ち上げました。最近では、語学としての日本語指導だけでなく、悩みや進学の相談にも応えています。



平田百合子さん

愛媛県西条市で石鎚山系の魅力を伝えるために、登山道に生息する樹木や草花、昆虫などをわかりやすく説明する自然解説員の渡部幸(わたなべさち)さんは、グアテマラで環境教育隊員として野生動物の保護に従事しました。協力隊参加前は、同じ年頃の人々との関わりが殆どだった渡部さんは、協力隊経験の中で、幅広い世代の人々、根本的に考え方の違う人々との密接な関わりを通して、豊かなコミュニケーション能力を養っていくことができました。その経験を生かして、地域に眠



渡部幸さん

る財産を一つでも多く発見し、一人でも多くの人に届けたいと、昔から地域で受け継がれている知恵をたくさん持っているお年寄りなどからも色々な話を聞きだしながら、地域の財産の伝承に取り組んでいます。

高齢化が進む高知県三原村で自然環境を生かした養鶏を営む藤田守(ふじたまもる)さんは、パラグアイでの人と鶏が共存する放し飼い養鶏を経験したことで、日本でも自然養鶏をやりたいと思うようになりました。帰国直後のサラリーマン生活で蓄えた資金を基に、三原村に入植し、電気も水もガスもない土地を一から開墾し、夢をかなえました。現在では、高齢化、過疎化が進む地域に何とか日本の若者を呼び戻そうと雇用創出にも励んでいます。

徳島県吉野川市にあるさくら診療所で管理栄養士として勤務する新野和枝(しんのかずえ)さんは、ニジュールの公共診療所で5歳児未満検診のサポートを行い、検診の待ち時間を利用してお母さんへ生活習慣や栄養についての講座を実施した経験をもっています。時間感覚のあまりに異なる現地の習慣に戸惑いながらも、何か少しでも役に立ちたいと、現地の人への感謝の気持ちを持ち続け活動に取り組みました。帰国後は以前に働いていたさくら診療所に戻り、地域の人々の健康維持のために、無農薬の米や野菜栽培を行い、病院食として提供し、病気の予防の大切さなどを地域へ発信し続けています。また、ニジュールで言葉がわからない者同士が会話する際の苦労があったからこそ、現在はできるだけ相手にわかりやすく伝える工夫を心がけています。

福留氏は最後に、「全てが違う環境の中で2年間頑張る青年海外協力隊は、私たちが失ったものを持っていると思う。協力隊はもう必要ないという人がいるが、私はそうは思わない。青年海外協力隊の経験を生かしながら、地域のために活躍する経験者の声を聞いて、明日からの生活に少しでも元気を与えることが出来れば何よりだし、若い人にはぜひ、チャレンジして欲しいし、今日の話が家族や友人にぜひ広めて欲しい。」と力強いメッセージを送ってくれました。

トークショー後のアンケート結果では、回答者の87%の人が「海外ボランティアへの理解が深まった、どちらかといえば深まった」と答えてくれました。また、自由回答では、「自分もボランティアに参加してみたい」、「もっと話を聞いてみたい」という感想が寄せられました。4名のパネリストは、確実に四国を元気にする種をまいてくれたようです。



藤田守さん



新野和枝さん



約200名の聴講者で会場は熱気に包まれました。